社会学部創立40周年記念シンポジウム：基調講演（2000年６月９日）

大学の知と社会の知

大　澤　真　幸[1)]

髙坂　関西学院大学社会学部の創立40周年を記念して、４月より毎月記念講演会を開いてまいりました。６月は講演会という形ではなく、基調講演とシンポジウムを開催したいと思います。テーマは「大学の知と社会の知」であります。

昨年、関西社会学会で「社会学の可能性」というテーマを取り上げたことがあります。社会学は一体どういう形で役に立つのだろうか、あるいは立たないのだろうか、という問題を討議いたしました。今年の日本社会学会でも、似たようなテーマで特集を組んでおります。

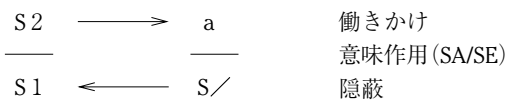
学校というのは、右から左に安直なかたちでは役に立たないところに存在価値があるという考え方もあるでしょうし、事実そういう面もあります。しかし根底的には、やはり学問は社会にとって何らかの役に立たなければならないとも強く感じております。大学の知と社会の知はどういう関係にあるのだろうか、また、どういう関係にあるべきだろうか、というテーマをめぐってこのシンポジウムを企画しました。

大澤真幸さんは、社会学理論面においてずいぶんオリジナルなお仕事をなさってきた若きホープでいらっしゃいます。すでに、両手では抱えきれないほどの著書をお持ちですが、最近では戦後の思想や、オウム真理教などの時事的なトピックについてもたくさん書き、そして発言されています。それまでの理論的な研究が、すべて現代の社会をどのように読み解いていくかという課題に、うまく接合されているように思っております。

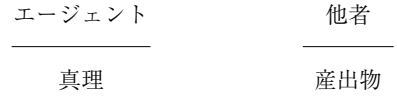
プログラムとしては、基調講演を行っていただいた後、それを受ける形で大澤真幸さんご自身にも加わっていただき、パネルディスカッションを行います。それではよろしくお願いいたします。

大澤　本日はこのような場にお招きいただきましてありがとうございます。あまり時間がないので早速始めたいと思いますが、「大学の知と社会の知」というテーマに沿って、お話をさせていただきます。

ご存じの方も多いかと思いますが、フランスの精神分析学者でジャック・ラカンという人がいます。このラカンという人は謎めいたことを言うので有名なのですが、フロイト以降の精神分析の歴史の中で、最も重要な人物だと思います。この人の謎めいた話の中のひとつに「４つのディスクール（言説）」という有名な図式があります。言説は４種類に分けられるという考え方なのですが、そのうちの一つが「大学の言説」です。



ここで、配置は、



を意味している。また各記号の意味は、
S１＝主人のシニフィアン　S２＝知　S／＝主体　a＝剰余享楽

図　ラカンによる「大学の言説」を示す図式

ラカンはこのような図式を描いているのですが、この４つの場所に記されている４種類の記号をいろいろと置き換えることによって、「４つのディスクール」が得られると説いています。まず配置の意味ですが、一番上は働きかけの主体になる部分です。その働きかけの対象となる他者がこ

1）京都大学大学院人間・環境学研究科助教授

こにきます。その他者によって意味される最終産物がここにあり、その産物はある真理を隠している、という構造になっています。

各記号の意味をご説明しますと、“S１”と“S２”それぞれの“S”は“signifiant（シニフィアン）”＝記号、意味するもの、言語を含む象徴です。“a”というのは、“agent（エージェント）”で、“S”は“subject（サブジェクト）”です。この４つがどのように配置されるかによって、「４つのディスクール」が得られるわけです。

それでは、これが何を意味するのかについてお話します。実は、「４つのディスクール」の中にはメインの〔規準的な〕マトリックスというのがあり、これが「大学の言説」と非常に深い関係にあります。これをご説明するために「主人の言説」というものについてお話ししますが、まずみなさんに理解していただきたいポイントは“S１”と“S２”という２つのシニフィアンの区別です。

“S１”は“主人のシニフィアン”を意味するのですが、倫理や価値に関わる言葉であり、“S２”は客観的な認知、知識に関わる言葉だと思ってください。哲学に言語行為論というのがありますが、言語には２種類の機能があると述べています。一つは、言語には事実を確認するディスクリクティブな機能を持つ事実確認文と、言語を使うことによって約束や命令などの行為を行う文があり、これをパフォーマティブなセンテンス＝執行文とよんでいます。それぞれの関係でいくと、“S１”は執行文であり、“S２”は事実確認文です。

“S１”の重要な特徴は、何の根拠もなしにある種の効力を発揮できるということです。これに対して、“S２”は他の記号によって支えられないと効力が妥当性を確保できません。具体的な例をお話しますと、旧約聖書の中で、神さまはアダムとエバに「禁断の木の実を食べてはいけない」と言っています。この言葉は典型的な“主人のシニフィアン”です。なぜなら、神さまが言っている以上、根拠はないのです。「どうしてですか？」と反論してはいけません。神が言われたということ、すわなち“主人のシニフィアン”とは、それ自体に根拠があるのです。それに対して、「この木の実には毒があるので食べてはいけない」と言えば“S２”に変わります。「毒がある」という根拠があるわけですから、この言葉は命令ではなく、因果関係を述べているに過ぎません。これは単なる事実の記述です。このように、それ自体が効力を発揮し、妥当性があれば“S１”の“主人のシニフィアン”であり、「なぜですか」と根拠を求められるものは“S２”＝“知”であるのです。

この図を見ますと、左側のエージェントの所に“S１”と“S２”がありますが、これは“S２”が“S１”によって支えられているという図です。

“S１”と“S２”の関係で一番わかりやすいイメージについてご説明しますが、たとえば経済学者がいるとします。経済学者ですから“S２”＝“知”となります。日本社会の経済的な問題についていろいろと分析し、「これだけの公共投資を行えば失業率がこれだけ下がるが、税金の負担もこれだけ重くなってくる」というようなことが分かってきます。しかしながら、それ自体は政治的な決断を含んではいません。それに対して、「○兆円投入して公共投資をしよう」と選択し、決断し、命令するのが政治家の判断、つまり“S１”です。この一番典型的な例が軍隊です。敵についていろいろな情報を集め、戦闘に必要な知識を高めます。それに対して「ここで攻める」、あるいは「退却する」と指揮官が判断し、命令するのが“S１”です。このように、“S２”が“S１”に意味を与えるというのが“主人のシニフィアン”の構造なのです。

いくつかの事例をお話しますが、ラカン派の精神分析学者のスラヴォイ・ジジエクという人によると、軍隊には「大佐」や「中尉」、「大将」などのランキングがありますが、もうひとつ命令の指揮系統を表すポジション、つまり「司令官」といった名称もあります。どういうわけか、軍人は必ずランキングを表す名称とポジションを表す名称の２つを持っているのです。おそらく、本来はランキング＝命令系統であったと思うのですが、スラヴォイ・ジジエクによれば、文革時代の中国の軍隊を除けば、すべての軍隊において、ランキングと命令の指揮系統とが違う名前で呼ばれているそうです。たとえば「ボスニア国連軍司令官ローズ大将」では、「大将」がランキングで、「司

令官」というのが命令系統におけるポジションを表しています。命令系統におけるポジションは単にファンクション＝役割であり、これが“S２”ですが、それ自体では社会的な効力を持ちません。どんな“S２”にもオーソリティを持った裏打ちが必要であり、それが軍隊におけるランキング＝“S１”であるわけです。このように、軍隊におけるランキングと命令系統の二重性は、“S１”と“S２”の二重性の典型例だと言えます。

もうひとつ大学に関係ある例として、世界のどこの大学でもそうですが、特に文化系の大学では古典の研究が非常に重要視されています。それ自体は良いことなのですが、次のようなことが多く行われているのです。ある結論を述べる時に「私がこう思う」と言ってもなかなか説得力を持ちません。ところが、「マルクスの『資本論』の中にこう書いてある」という形で物事を提示すると、突然説得力が出てくるわけです。

実は、私の今日の話もこの作戦を使っています。ラカンのいかにも謎めいた言葉を紹介して、それについて私が解釈すると、なぜか説得力が向上するのです。しかし、考えてみればこれは不思議なことです。マルクスが言ったからといって正しいとは限りませんし、100年以上も前の学説です。なにゆえ「マルクスによると……」と言われると、何か真理を説かれているような気分になるのでしょうか。それは、何かについて述べるだけならば“S２”だけですが、「マルクスによると……」と言った瞬間に“主人のシニフィアン”による裏打ちがつくのです。すると突然、そこに知識としての重みが出てくるわけです。

このように、“S１”と“S２”との間が完璧にシンメトリカルに調和していれば下の部分はないのですが、実は“S１”と“S２”との間にはある矛盾があります。そのために、必ずプラスαの剰余対象が出て来てしまうのです。この矛盾が発生する根拠は、もともと主体の中に穴が開いていて、その穴を“a”によってふさぐというものです。

これらを理解した上でもう一度「大学の言説」に戻ってくると話は簡単になります。　大学は“主人のシニフィアン”とは違って、ニュートラルな“知”を提供するものです。その“知”は何のためにあるかというと、“a”＝社会の中で人々が知りたいという特殊な対象について、説明したり、考えたり、記述したりする。つまり、特殊な対象を探究するために“知”を提供するということです。そして大学が目指す産物は、人間を主体化していくことであり、成熟した大人にしていくことです。では、それによって最終的に隠蔽されている真理は何でしょうか？　これが“S１”です。端的に言えば、「大学の知」は表むきはニュートラルな“知”を装っているが、実はその背後に、ある種の支配・服従の権力関係を隠し持っている、ということです。

このことは「医者の言説」を考えてみればわかりやすいと思いますが、医者はある医学的なニュートラルな“知”を提供しています。しかし、医者が社会的に効力を発揮する時、患者が医者に依存するという関係が起こります。つまり、医者と患者の中に、ある種の主従関係が隠されているからです。

社会科学においても、これと同じことが言えます。社会学や経済学を研究している人はニュートラルな“知”を提供しています。しかし、そのことによってイデオロギーや、国家制度を守ったり、倒したりするという政治的な権力関係を背後に隠し持っているという構造になっているわけです。これらが「大学の知」ということの全体的なイメージです。

さて今日は、私は「大学の知」がどのような危機的状況にあるかをお話ししようとしているのですが、先ほどのようなことを述べると、たいてい左翼的な人は、「『大学の知』はニュートラルな知識を装いつつ、国家権力に奉仕している。大学はある種の国家権力や支配階級の道具になっている」という言い方をします。しかし、私はそのようなことを言いたいわけではありません。今我々が直面している困難とは、この関係が崩れていることであり、「大学の知」がおよそ権力関係を含意できなくなっていることの方が、悲惨な結果を招くということなのです。

では、その前にひとつのいたずらというか、メタファーを申し上げます。

私の考えでは、「大学の知」は探偵小説における「探偵の知」によく似ています。探偵小説にお

ける探偵の役割を、大学は社会の中で果たしてきたのです。みなさんも探偵小説を読んだことがあると思いますが、探偵小説は意外に新しいジャンルです。エドガー・アラン・ポーを除くと、シャーロック・ホームズ　シリーズのコナン・ドイルが、一番最初の探偵作家だとされています。コナン・ドイルが始めてホームズ　シリーズを書いたのは1897年です。よく言われることは、探偵小説の登場と精神分析の登場は、ほとんど同じ時期だということです。おそらくこれは、同じ社会現象の裏表のような関係にあるからだと思います。フロイトが非常に熱心なホームズの読者であったことも、よく知られています。

コナン・ドイルの小説はみんな短編ですが、1920年代にはアガサ・クリスティのような長編探偵小説が出てきました。1920年代は文学史的には非常に興味深い年で、それまでの古典的な小説が成り立たなくなった時期です。つまり、起承転結のある古典的なリアリズム小説がダメになってきて、わかりにくい不条理な前衛文学が登場してきました。1920年代は、純文学の領域では現代小説を生みだし、大衆文学の領域では本格探偵小説を生みだしたのです。精神分析の登場や前衛文学の登場のような大きな社会的な“知”の変化と、探偵小説の成立や変化は連動していると考えられます。おそらく、探偵小説の登場や本格化は、ある種の大きな社会的変化、特に人間の精神における大きな変化の象徴だったと思います。

では、それらの背後にあった大きな変化とは何だったのでしょうか？　これは、探偵小説を考えるとよくわかるのですが、探偵小説の決定的な特徴は、事件の始まりが一番最後になって明かされるということです。

哲学的に言えば、探偵小説が登場したのは、出来事の連なりや歴史を一つの物語として描くことが非常に困難になってきたからです。物語として描くことが容易だった時代はリアリズム小説でよかったわけですが、物語の連なりが一貫性を持った、わかりやすいものとして描けなくなった時に、一方ではリアリズムを否定したような前衛小説が生まれ、一方では本格探偵小説が生まれました。探偵小説における探偵の役割が何かというと、単に犯人を当てることではなく、ある不可解な出来事が起きた時、そこで一体何が起こったのかを教えてくれることです。一度こわれかけた物語を回復してくれるのが、探偵の役割なのです。

この探偵と同じように、社会の中で人々がやってきたことは何なのか、また世界の中で起きていることは何なのかを解き明かしてくれるのが「大学の知」というものです。もう少しアナロジーを続けますと、シャーロック・ホームズで言えばワトソン博士のように、探偵小説には必ず間違える人が登場します。なぜ、ワトソンが必要なのでしょうか？　ワトソンはホームズの引き立て役であるという部分もありますが、それだけではありません。ワトソンはなぜ間違えなければならないのでしょうか？

私達は普通、間違いを拒否して真実に到達すると思っています。しかし探偵小説のポイントは、間違いは真理の外にあるのではなく、間違いこそが真理のための不可欠なステップであり、真理へと導く鍵となっているということです。ですから、間違ってくれる凡人が登場してくれないと困るわけです。間違いは犯人の細工にひっかかってしまっているわけですから、犯人の意図を解き明かす大きな手がかりとなります。ある意味では、間違いは真実の一部であり、ほとんど真理に到達しているとも言えるわけです。

ホームズ　シリーズの中に、馬が行方不明になる『白銀号事件』という小説がありますが、その中でホームズと凡庸な警察官とのこんな対話のシーンがあります。警察官が「その他に私が注意すべきことがないでしょうか？」と聞くと、ホームズが「あの晩の犬の不思議な行動について注意なさるといいのではないでしょうか」と言います。警察官が驚いて「えっ、犬は何もしなかったはずですが」と言うと、ホームズが「そこが不思議だと言うのです」と言います。ここで重要なのは、凡庸な警察官はすでに真理に到達しているということ、すなわち犬は何も叫ばなかったという完全な手がかりをつかんでいるということです。しかし、それがすでに真理であるということを彼は知らないのです。ホームズはこの真実から、犯人が犬や馬と非常に親しい関係にあった人物だと推測するわけですが、凡庸な人の言っていることが、真理への手がかりとなっているのです。

「大学の知」もこれと同じ関係にあり、大学における「社会科学の知」は、今の「探偵の知」とよく似ています。つまり、凡人は正しいことを言っているのだけれど、自分が何をやっているかが分かっていません。それを探偵が言葉にしてあげるわけです。つまり、人々が無意識にやっていることを解き明かしてあげるのが、「大学の知」の機能であると思います。

探偵小説では殺人事件が起こります。精神分析の言葉を使えば、これは“トラウマ”なんです。とうてい起こりそうもない悲惨な事件が起きてしまったことによって、何が起こりそうで何が起こらないか、何が可能で何が不可能かが、もはや分からなくなってしまったということです。そこで探偵が何をするかと言うと、一見不可能に思えることが、実は充分に可能なことだったのだと教えてくれるのです。それによって、社会の中で許されていることと、許されていないことの秩序が、あらためて回復します。つまり社会のトラウマを解消し、社会の精神分析の役割を果たすのが探偵であり、それと同じことを「大学の知」が行っているわけです。

ホームズがやっていることの中で一番重要なのは、ホームズがそこに居るということです。信じられないことが起きているけれど、「ホームズがきっと最後に解決してくれる、ホームズがいる限り安心だ」とみんなはあてに出来るわけです。これと同じことが大学にも言えるわけですが、社会で起きている不可解なことや混乱についても、人々は大学があることで安心できるのです。

しかし、このようなユートピア的な「大学の知」が、現在は機能できなくなっています。先ほどの図にありましたように、「大学の知」がうまくいっていたのは、ニュートラルな“知”を提供することによって、倫理的・政治的な決断が導かれるという構造が社会の中にあったからですが、現在は“S１”が“S２”を意味することができない構造になっています。この理由について、ある寓話をお話しします。

ボルヘスの探偵小説に、「バベルの図書館」という寓話があります。「バベルの図書館」とは完全に普遍的で包括的な図書館のことで、そこにある無数の本にはアルファベットの可能な組み合わせが全部含まれています。だから、あらゆる言語で表現可能なことが、この図書館にはすべて入っているということになります。潜在的には、この図書館では宇宙のすべてが説明されているはずなのです。

人々は最初、この図書館に大きな希望や喜びを感じます。なぜなら、この図書館の中には深淵な哲学や、望ましい社会科学が含まれているはずだからです。具体的には、宇宙の中の一人ひとりの人間の行為をすべて解き明かしてくれる本があり、そこにはアクションや経験、未来までが含まれているのです。そういう本のことをボルヘスは『弁明の書』と呼んでおり、人々はこの『弁明の書』を探しはじめます。しかし、今度はすぐに大きな失望に見舞われます。なぜなら、あまりにも無数の本があるために、どれが本当の『弁明の書』であるかがわからずに、結局は無いに等しいことになってしまうからです。

また、ボルヘスは“書物の人”という人間が存在しているという迷信を人々は信じていると言います。“書物の人”とは、すでに『弁明の書』を読んだ、ある一人の司書で、人々はまたこの人を探しはじめます。そして100年間も探し求めるけれど、結局は見つかりません。これが『バベルの図書館』という寓話です。

さて、私が申し上げたいのは、もし“知”があまりにも普遍的で包括的であれば、逆にその時には一切の“知”が存在しないのと同じであるということです。今日の大学を中心とした情報の集積の方法は、『バベルの図書館』的な状況に似ています。つまり、大学という情報センターにあまりにも多くの情報が集積されてくると、逆に、真理を知っているはずの超越的な他者が存在しているということがあてにできなくなるのです。シャーロック・ホームズは本当は居ないんじゃないか、という不安が人々の中に生まれてくるのです。

このことを社会学者は“リスク社会”と呼んでいますが、現代のテクノロジーの猛烈な発達によって現代社会に固有のリスクが生まれます。その代表的なものが環境問題や生命倫理に関わる問題です。生命科学の領域では、今まではとうてい不可能だと思われていたことがどんどん可能になっていますが、それによってものすごい量の知

識＝“S２”がたまってきます。しかし、どんなにその知識がたまってきても、具体的に何をやるべきか、クローン人間を作っていいのか、遺伝子をさわってもいいのかという倫理的なパフォーマティブな結論をどうしても導くことが出来ないのです。環境問題もそうです。地球の将来についていろんな予想が生まれますが、具体的に二酸化炭素を一年間でどれだけ使ってもいいのか、というような政治的な結論を導くことが出来ません。

知識はどんどんたまってくるけれど、それは“主人のシニフィアン”のように、ある政治的・倫理的なインプリケーションを持つものになってこないということが、現在の「大学の知」の困難であると思います。今や、「大学の知」はホームズの役割を果たしていないのです。

最後に一言だけ申し上げて終わりにしたいと思います。

若い人達の中にいわゆる“オタク”が存在しますが、この社会現象はある意味で「大学の知」がダメになってしまったことの反面だと言えます。社会における探偵の不在に対するディフェンシブな反応として、オタク的な知識が生まれたと考えてみてはどうでしょうか。

若い人のほとんどがある意味で“オタク”ですが、“オタク”とは一体何でしょうか？　“オタク”は昔から存在していた専門家やマニアを現代的に呼び変えているに過ぎない、と言う人がいますが、これはちょっと違います。いわゆるスペシャリストと“オタク”とは、どこかが違う。ラカンの図を見ればわかりやすいのですが、“オタク”は“S１”＝倫理的・政治的なインプリケーションをいささかも意味することが出来ない“S２”なのです。つまり、“S２”の下にまた“S２”が来てしまうという構造が「オタクの知」です。専門家の“知”はどんなに細かいものであっても、何らかの社会的な意味を持っています。しかし、「オタクの知」は情報的には非常に密度が高いけれど、およそ意味がありません。パフォーマティブなインプリケーション、つまりそれによってどういう風に自分の生き方が変わるのか、どういう風に社会的に行動していけばいいのかといったものが全く生まれてこないのです。ラカンの用語を使うならば、「『オタクの知』は“主人のシニフィアン”無き“シニフィアン”である」と言えるのです。

“オタク”というのは、一見異なった方向性を向いた２つの特徴があります。第１に、「オタクの知」には終わりがありません。どんな段階に行っても、これでデッドエンドだということがないので、どんどん細かい知識になっていきます。ほとんど無限とも思われる情報の集積は、その部分だけ見れば「バベルの図書館」に似ています。しかし第２に、「オタクの知」には「バベルの図書館」と全く逆の特徴があります。それは、「オタクの知」は絶対に限界を超えない、有限であるということです。“オタク”というのはアニメーションであれ、テレビゲームであれ、自ら選んだ特定の主題の部分の中に閉じ籠り、絶対に外には向かいません。これが「バベルの図書館」とは全く逆の性質であるわけです。

私達はむしろこう考えるべきではないでしょうか。“オタク”の主題は特殊であると思いがちですが、そうではなく、“オタク”にとってはその特定の主題の領域そのものが宇宙なのです。客観的にみれば非常に特殊な知識なわけですが、“オタク”当人の主観的な感覚からすれば、充分にユニバーサルで包括的な知識であるのです。

かつて人々が社会の中で日常的に生きている時には、それぞれ自分についてローカルな知識しか持っていませんでした。しかし、「大学の知」が探偵小説の探偵のように機能していた時には、人々は自分が持っている知識はローカルなものだけれど、それを括弧に入れれば、探偵が見ているような超越的な視野から眺めた知識に移行することが出来ると考えていたのです。ワトソンが言うように、「おれは間違っているけれど、きっとホームズは知っている」という考え方ですね。

しかし、今日はそういう状況ではなくなりました。つまり、探偵としての大学が存在しなくなったのです。もうホームズがあてにできないとなった時、ワトソンはどうすればいいのでしょうか。ワトソンは、「自分の知識はローカルだけれども、このローカルな知識がそれ自体充分にユニバーサルな知識だ」と捉え直すのです。“オタク”とはそういう現象です。ほとんど偶然的に与えられている主題自体を宇宙として扱うわけですね。

大学で社会学を教えていて、私はものすごくイライラすることがあります。それは、“オタク”っぽい学生達は、どうしても外に視点を移すことができないからです。しかし、これには社会科学的な必然性があり、いわば「大学の知」の危機の反面であるとも言えるのです。「大学の知」が探偵としての機能を失ったことの反作用として、オタク的な“知”の在り方が生まれたわけですから、我々大学サイドの人間にも責任があるのです。

ですから我々は、大学がかつて持っていた本当の意味でのユニバーサルで公共的で超越的な“知”を、どうすればもう一度回復することができるのか、ということを考えなければならない段階に来ているのではないかと思います。

髙坂　ありがとうございました。ラカンから話が始まった時は、一体どんなお話になるのだろうと不安に思っておりましたが、大変明解な分析を含んだお話だったと思います。後半はこの問題提起を受けてパネルディスカッションを行いますが、比較的小さな質問がありましたら、この場でお願いしたいと思います。

山内　かつて私が呼んだ本の中には、科学者は何か意義があるから形作っているのではなくて、単純に知りたいからそれを見つけ出してきたのであり、結果として社会の役に立ったけれども、役に立つか否かということ自体は科学者の意図にはなかった、ということが書かれてありました。もし、これが真実であるならば、科学者も所詮は“S２”と“S２”の図式であり、結果として“S１”と“S２”の図式に置き換えられただけに過ぎないということになると思うのですが、それについてはいかがでしょうか。

大澤　科学者といっても人によってそれぞれなのですが、私自身も含めて、自己の研究が社会に役立つからやっているわけではありません。多くの科学者の自己意識はそうだと思います。そこから直接的に、倫理的・政治的な結論を出そうと思ってやっているわけではないのです。

先ほどの図式で考えると、真理は隠蔽されているというところがポイントなのです。それは学者が隠しているわけではなくて、学者の自己意識の中から隠されているわけです。つまり、自分は単に客観的な知を集めているだけなのだと思っているわけですが、そのことがインプリケーションを持ち、何らかの価値を持つわけです。それによって人は、世界についてのある見識を持つことが出来ます。学者の個々の意識からすれば全く客観的な知を集めているだけなのですが、本人も意図せざる結果として何か意味のある知識、価値のあるものに変わっていくことが古典的な「大学の知」であるわけです。

これに対して「オタクの知」は100パーセント意味がありません。価値を持つということに全くこだわらないのです。「大学の知」は、第３者から見ればある種のインプリケーションを持つ構造になっていますが、「オタクの知」の場合は第３者が見ても何の価値もありません。結論を言えば、学者が意図的に、倫理的・政治的な結論を出そうとしているわけではないということです。

髙坂　ありがとうございました。他にもいろいろと質問はあるかと思いますが、続きは第２部のパネルディスカッションの中で行いたいと思います。

歩きながらお話しておられる大澤さんの姿が、だんだんとシャーロック・ホームズのように見えてまいりました。大澤先生、どうもありがとうございました。